

第2回OLIS－慶應義塾大学保険フォーラム

福澤諭吉と保険事業

慶應義塾大学経済学部教授
小室正紀

課題

- 福澤諭吉は、どのように生命保険事業にかかわったか
- 福澤諭吉はなぜ生命保険事業を重視したか

『西洋旅案内』慶應3年(1867)

慶應義塾
図書館蔵



『西洋旅案内』附録

附録 商法

コンシエール勤方の事

両替屋の事

商売船雇入の事

積荷請取状の事

商売船質入の事

荷物送状の事

売捌勘定書の事

災難請合の事

災難請合の事

- 第一 人の生涯を請合ふ事 18行
- 第二 火災請合 3行
- 第三 海上請合 25行

日本最初の保険業の紹介

「附録 商法」の目的①

「今外国へ行って交易商売をんには略彼国の商法を知らざれば必ず不都合なり。」

「附録 商法」の目的②

「今この巻末には、彼国商人の取扱ふ金の取引、商売船の雇方、海上荷物の請合方等、商法の大略三、四箇条を記して本編の附録となせり。」

丸屋と死亡請合

早矢仕有的(1837-1901)

明治2年(1869)

「丸屋商社之記」

明治3年 日本橋に出店

明治4年 「細流会社」設立

明治7年

「丸屋商社之記」附録

「丸屋商社死亡請合規則」



丸屋商社日本橋店①



丸屋商社日本橋店②



細流会社 明治4年設立

零細な資金を集めて大事に備える
社内「積立貯金組合」

- 福澤の掛金残高

明治7年1月 553円

明治11年1月 1090円

「総勘定」(『福澤諭吉全集』21)

丸屋商社死亡請合規則

- 明治7年5月 「丸屋商社之記」附録
- 「社中死亡する者へは死後即時に金五拾円を与えて病中死後の用に供す可し」
- 受給者：社中の者
- 元金500円
「福澤氏より金百円を無利息にて借入」

明治生命保険会社の創業

- 明治12年末 阿部泰蔵・荘田平五郎・
小泉信吉が相談
- 「生命保険会社創起見込書」
阿部・荘田・小幡篤次郎
- 明治14年2月
交詢社の一室に創立事務所
- 明治14年7月 第一次総会・営業開始

明治生命保險会社發起人

小幡篤次郎

朝吹英二

阿部泰藏

杉本正徳

莊田平五郎

肥田昭作

西脇悌二郎

早矢仕有的

奥平昌邁

中村道太

渥美契縁

阿部泰蔵明治生命保険会社

1849-1924



明治生命設立の目的①

- 阿部泰蔵「明治生命四拾周年紀年」

「外国貿易盛に開けて生産状態亦旧態を墨守する能はず、農工商亦時勢の推移に応じて其業を經營せざる可らず、故に家計の中心たる主人死去すれば家族の困難に陥るは自然の数なり。」

明治生命設立の目的②

- 阿部泰蔵「明治生命四拾周年紀年」

「一朝不幸にして死去すれば、遺族は俄かに衣食に窮し、甚しきは病中及び死後葬祭の費用も、**親戚朋友の厚意に待たざる可らざる**が如きことあり。」

明治生命設立と福澤①

- 明治14年6月17日

小泉信吉・日原昌造宛て福澤書簡

「生命保険会社は阿部物集女の担任にて
専ら進歩中に御座候」

明治生命設立と福澤②

- 明治14年7月8日

小泉信吉・日原昌造宛て福澤書簡

「生命保険会社阿部氏の**担当にて**出来
本日は発起人明治会堂に集会、明日より開業なり。」

明治生命設立と福澤③

- 明治15年8月30日

田中信吾宛て福澤書簡

「友人阿部泰造其外数名の発起にて去年七月より生命保険会社創立の処、百事都合能行はれ、目下被保険人之数千七百余名、保険金高八十万円にも相成候由、**各地方への巡回入社募集**之事は、創業以来の慣行にて…」

統計学・生命保険・福澤グループ

- 万延元年(1860)『万国政表』(古川節蔵)
- 明治11年末 製表社
小幡篤次郎、阿部泰蔵、森下岩楠、杉亨二
- 明治12年1月31日 大隈重信宛書簡
大蔵省との協力
「御省の思召立、何卒尽力為致度事に御座候」
- 明治13年11月 統計協会『統計集誌』創刊
統計協会の会員の三分の一は義塾出身

動機：福澤諭吉の原体験①

「中津に帰ってから私の覚えていることを
申せば、私共の兄弟五人はドウシテも
中津人と一緒に混和することが出来な
い」

『福翁自伝』

動機：福澤諭吉の原体験②

一母五子、他人を交えず世間の附合いはなく、明けても暮れてもただ母の話を聞くばかり……。ソコデ中津に居て、言葉が違い着物が違ふと同時に、私共の兄弟は自然に一団体を成して、言わず語らずの間に高尚に構え、中津人は俗物であると思つて、骨肉の従兄弟に対してさへ、心の中には何となくこれを目下に見下して

『福翁自伝』

動機：福澤諭吉の原体験②

「親戚朋友の厚意」
の世界からの距離

他人の財によらざる独立

独立とは、自分にて自分の身を支配し、他に依りすがら心なきを云ふ。自(みづ)から物事の理非を弁別して処置を誤ることなき者は、他人の智恵に依らざる独立なり。自から心身を勞して私立の活計を為す者は、他人の財に依らざる独立なり。

『学問のすゝめ』三編

福澤：なぜ生命保険

- 生産状態亦旧態を墨守する能わず
→ 新たな非血縁的社会
- 他人の財に依らざる独立
- 原体験：共同体からの距離感